

論文内容の要旨

(1) 論文内容の要旨

本論文の主題は、公的介護保険の開始に伴い制度的に新たに導入されたユニットケアという高齢者施設のケアのあり方が、どのような特質を持つ労働であるかを明らかにし、それはどのような理論的枠組みで説明できるかを考察するものである。

日本における認知症ケア理論のパラダイム転換が生じたのは1990年代後半であり、認知症ケアと介護労働についての社会学的研究の蓄積は少なく、ましてユニットケアについての社会学的研究はさらに少ない。そうしたなかで、本論文は従来型集団ケア実施施設とユニットケア実施高齢者施設を対象としたフィールドワークを通して、ケアワーカーの労働内容、労働過程、労働編成に関する事実を詳細に明らかにする。そのうえで、ユニットケア高齢者施設におけるケア労働の特質が従来型集団ケア実施施設における労働と異なり、「介護労働」「疑似家事的労働」「気づかい労働」といった肉体労働、頭脳労働を重層的、同時並行的に行う「ながら遂行型労働」といった性格を持ち、労働編成のあり方もそうした労働を可能にする「ながら遂行型労働編成」という形で成り立っている事実を指摘する。さらに、そうした事実を踏まえ、ユニットケア施設におけるケア労働について、新たな理論的枠組みでの理解が示される。

(2) 論文構成

序章 研究の目的と意義

1. ケアシステムの転換とケア労働
2. 社会学は認知症・認知症ケアをどう捉えてきたか
3. 「感情労働」という概念—自己疎外からケアリングの要素へ
 - 3-1. ホックシールドの見出した感情労働
 - 3-2. ホックシールド以降—特に看護領域における「感情労働」研究
 - 3-3. ケアと感情
4. フィールドでの発見
 - 4-1. フィールドワークの概要
 - 4-2. 「ながら遂行型労働」と感情労働の深まり
5. 本研究の意義—「ながら遂行型労働論」の提起
6. 本論文の構成

第一章 認知症ケアの現在

1. 認知症ケアのパラダイム転換
2. 認知症ケアの変容過程
 - 2-1. ケアの不在—収容対象としての認知症者(1970年代まで)
 - 2-2. 「呆け老人をかかえる家族の会」の誕生—介護者本位のケア(1980年代)
 - 2-3. 民間の先駆的実践—呆けても心は生きている・個の発見(1990年代)
 - 2-4. 尊厳を支える全人的ケア—ユニットケアの誕生と制度化(2000年代)
3. ユニットケアの現在
4. 高齢者施設におけるケア労働
 - 4-1. 従来型集団ケアにおけるケア労働/機能分化させたチームケア
 - 4-2. ユニットにおけるケア労働/文脈依存型ケア
 - 4-3. ユニットにおけるケア労働はどのように語られているか

第二章 「日常生活を共にする」ケアとは何か

—「疑似的家事労働領域」と「ながら遂行型労働」—

1. 認知症高齢者と「日常生活を共にする」ことの意義
2. 調査の対象と方法
 - 2-1. タイムスタディ法
 - 2-2. 生活時間調査
 - 2-3. 調査の対象
 - (1)ユニットケア実施/介護老人保健施設 アオギリ園
 - (2)ユニットケア実施/特別養護老人ホーム トチノキ園
 - (3)従来型大規模処遇/介護老人保健施設 クスノキ園
 - (4)従来型大規模処遇/特別養護老人ホーム ネムノキ園
 - 2-4. 調査の方法
 3. コミュニケーションにおける質と量の差
 4. 「ながら遂行型労働」
 5. 「疑似的家事労働領域」の誕生
 6. ユニットにおける労働編成
 - 6-1. 労働空間
 - 6-2. 労働編成
7. 小括

第三章 「自尊心を支える」ケアとは何か

—「ながら遂行型」に提供される「気づかい労働」—

1. 「自尊心を支える」ことの意義
2. 脱アサイラム状況という視点と問題の所在
3. 調査の対象と方法
 - (1)ユニットケア実施/特別養護老人ホーム シラカシ園
 - (2)アオギリ園 3階東ユニット
4. 「VIPユニット」の生活
 - 4-1. 無視できない「告げ口」
 - 4-2. 結束による力の行使
5. 利用者への「気づかい労働」
 - 5-1. ひとり職場での「気づかい」
 - 5-2. 関係修復としての「気づかい」
6. 「気づかい労働」はどのように行われるか
 - 6-1. 労働の実態—不規則かつ長大な勤務時間
 - 6-2. 労働の実態—ひとりの労働
 - 6-3. 労働の実態—孤独な夜勤
 - 6-4. 労働の実態—仲間との連帯
 - 6-5. 労働の過酷さ
 - 6-6. 第二次的調整
7. 小括

終章 ユニットにおけるケア労働の特質—ながら遂行型労働論の提起

1. 利用者の重度化とケア労働
2. 家事労働的性質の付与
3. 「ながら遂行型労働」とは何か
4. 残された課題と展望
 - 4-1. 重度認知症者とのかかわり
 - 4-2. ながら遂行型労働を支えるもの

(3) 各章の内容の要約

「序章、本論文の目的と意義」

序章では、まず、介護保険の導入ならびに認知症ケア理論のパラダイム転換によってもたらされた市場化に伴う経営者側の利潤追求、効率優先の流れと「高齢者の尊厳を支える」というケア倫理を強める方向という相反する社会的要請が、ユニットケア実施施設におけるケアワーカーの労働にいかなる形で現象しているか、さらにそうした労働実態を、先行の認知症ケアについての社会学的研究、感情社会学研究を踏まえてどのような理論的枠組みによって読み解いていくことが可能なのかといった問題意識が本論文の出発点にあることが示される。

次に、結論を先取りする形で、そうした関心にたって行ったフィールドワークのデータの分析を通して明らかにしえたユニットケア施設における介護労働の特質とそれが持つ理論的意義が次のように示される。すなわち、ユニットケア施設におけるケア労働に関しては、ホックシールドの感情労働論を踏まえ、その制度化によって「感情労働のさらなる深まり」が要請されるようになったとする春日キスヨの見解と、それを否定し「責任労働の強化」とみる上野千鶴子の見解がある。

しかし、調査データの分析から、ユニットケアにおける介護労働では、ホックシールドが提唱した「表層演技」や「深層演技」といった感情労働のみでなく、看護労働の研究を通して James, Nicky や Steinberg, Ronnie が指摘した、他者の感情管理を行う労働（岡氏はそれを「気づかい労働」と名づける）が行われている。さらに、その「気づかい労働」は要介護高齢者とのコミュニケーションという形で単独の労働としてなされているのではなく、高齢者の日常生活を支えるためのその都度の身体的ケアや「疑似的家事労働」といった肉体労働・頭脳労働と重層的かつ同時並行的になされるといった特徴を持つ。そして、こうした形の労働は、「ながら遂行型労働編成」という労働編成によってしかなしえない事実を述べる。

その意味で本論文の研究上の意義はユニットケア施設における労働がいくつかの労働から構成される「ながら遂行型労働」であり、「ながら遂行型労働編成」という特徴をもつ点を詳細な事実によって明らかにした点、さらに、上野千鶴子のいう「責任労働」という捉え方では捉え切れないものであることを示した点にあるという見解が述べられる。

「第一章、認知症ケアの現在」

第一章ではまず、ユニットで働くケアワーカーたちが持つ理念的規範や、ケアワーカーや施設に対する社会的要請の背景としてある認知症ケアに関する理念的变化が①1970年代まで「収容対象としての認知症者」②1980年代「介護者本位のケア」③1990年代「呆けても心は生きている・個の発見」④2000年代「ユニットケアの誕生と制度化」という区分で整理される。

次に、高齢者施設ケアに関する論考や社会学的先行研究を通して、従来型集団ケア施設における介護労働が効率的な業務遂行を目的とする一定の労働内容を設定したチームケアであり、その効率性は利用者に対してケアワーカーが持つ相対的に高い権力によって維持されている。一方、ユニットケアにおけるケア労働はそのつどの個々の利用者の生活の文脈に沿って、臨機応変に労働内容を変えていかざるを得ない文脈依存型の労働であるという言及をとりあげ、従来型集団ケア施設とユニットケアにおけるケア労働の違いが整理される。これはフィールドワークで見出された事実を後に考察していく際にひとつの下地となる。

次の第二章、第三章ではフィールドワークで得られたデータをもとに分析が進められる。

「第二章“日常生活を共にする”ケアとは何か——“疑似的家事労働領域”と“ながら遂行型労働”

第2章ではまず、採用した調査方法論について述べ、そのうえで調査対象としたユニットケア実施施設（介護老人保健施設1園、特別養護老人ホーム1園）、従来型大規模処遇施設（介護老人保健施設1園、特別養護老人ホーム1園）の概要が述べられる。

そのうえで従来型大規模処遇施設とユニットケア実施施設におけるケアワーカーの労働内容、

労働過程をタイムスタディ調査法で行い、それを NHK の生活時間調査の方法で処理し、そのデータに基づいての分析がなされる。

その結果、従来型大規模処遇施設とユニットケア実施施設とで大きくみられた差異として①「排泄介助」「食事介助」「コミュニケーション」においてユニットケア実施施設の行為率が従来型に比べて高く、「記録・調整」ならびにケアワーカー自身の「自己維持と充足」についてはユニットケア実施施設の方が従来型より低い ②ユニットケア施設においては一定の時間のうちに多様な働き方がみられる ③ユニットケア施設においては「食事」に関する家事が高い割合で行われているといった事実を指摘する。さらに、従来型施設とユニットケア施設における利用者とケアワーカーのコミュニケーション様式にも大きな違いがみられ、従来型では利用者に対する「選択を求める言葉かけ」や「指示・抑制する」といったその場限りの言葉かけが殆どであったのに対し、ユニットケアでは時間的経過を踏まえながら、ケアワーカーがその都度の利用者のニーズに応える形で相互に組み合う膨大な量の応答的コミュニケーションがなされている事実を指摘する。

次に、そのような形で見出された事実を踏まえ、ユニットケア施設における労働の特質を「ながら遂行型労働」として提示できるのではないかという岡京子の見解が示される。すなわち、従来型施設におけるケアワーカーの働き方が、その日の役割分担にしたがって効率的に同種の作業をまとめた時間続けるという形の労働であるのに対し、ユニットでは「排泄介助」「食事介助」等々の多様な労働が利用者の要求や必要に応じてランダムに行われる。さらに、従来型施設では調理や清掃等、他職種によって分担されていた労働が、ユニットケア施設では「疑似的家事労働」領域としてユニットケア特有の労働内容として担われていた。また、利用者とのコミュニケーションにおいても、従来型ケアに比べ、ユニットケアでは「疑似的家事労働」や身体介助を「ながら遂行型」に行うなかで、双方向的な膨大な量のコミュニケーションがなされていた。こうした事実から、ユニットケア労働を「ながら遂行型労働」と名づけることが出来るのではないかというのである。

さらに、従来型施設とユニットケア施設の労働編成の分析をケアワーカーがおかれた生活空間、勤務表といった労働環境の検討を通して行っている。その結果、空間配置において、従来型施設ではケアワーカー固有の空間が保障されているのに対し、ユニットケア施設ではそれが保障されていない。さらに、勤務表の組みかたもユニットケア施設ではひとり勤務、かつ「夜勤」回数も多く、「通し」という 13 時間続きの勤務もあるといった点で従来型のそれと比べてより過酷である。そのつど利用者のニーズに応え、一日の生活の流れを止めない「ながら遂行型労働」という働き方がこうした形のケアワーカー個人の私的生活を犠牲のうえに成立している事実を見出している。こうした点で、ユニットケア施設の労働編成を「ながら遂行型労働編成」と名づけてよいだろうと述べる。「第三章、「自尊心を支える」ケアとは何か―“ながら遂行型”に提供される“気づかい労働”―」

第三章では、参与観察と要介護高齢者に対するインタビューにより得られたデータをもとに、ユニットにおけるケアワーカーと高齢者の相互作用様式が両者間のコミュニケーションを通して明らかにされる。身体的自立度が高く認知症の程度が軽いといった自己主張能力の高い利用者が生活するユニットを対象として、高齢者の自尊心を維持するための労働が高齢者とケアワーカーの相互作用、高齢者同士の関係性、ケアワーカーによる高齢者集団の関係調整といった場面でどのような形で遂行されているかについての分析が進められる。

その結果、大規模施設利用の高齢者に比べ、ユニットケア施設では、利用者がケアワーカーに対し力を発揮する場面がみられた。それは経営者に対する「告げ口」「利用者同士の結束」ケアワーカーに対する不満の表明といった形で現象していた。そうしたなかでケアワーカーは「無視」や「聞き流す」といった表層演技による自己の感情管理のみならず、利用者の自尊心維持をはかるために、「敬語」の使用、時間外の私的時間を使つての関係修復といった細心の注意をはらつての利用者の感情への働きかけを行っていた。こうした労働を本論文ではホックシールドの感情労働概念を超える部分を含んだ「気づかい労働」と名づけている。

さらに、そうした「気づかい労働」はどのように行われているか。それは大規模集団ケア施設の労働を食事、入浴、排泄といった最低限の生理的欲求を満たすためのケアをタイムスケジュール

にそって複数のケアワーカーが一斉に行う労働として、それと対比させる形で語りえるような労働ではなく、また、単独の労働として行われるのではなく、不規則でかつ 13 時間 30 分に及ぶ「通し」といった長大な労働時間のなかで、利用者個々人の文脈を読み解きつつ、同時に身体と生活を支える頭脳労働、身体労働を行うなかで行われる、重層的かつ多様な労働と同時並行的に遂行されている労働であるというのである。

そのうえで、そうした過酷な労働を支えているものは何かといった点が検討される。それは同じ施設でユニットケアを担う「仲間との連帯」であり、さらに過酷な労働を何とか切り抜けるためにケアワーカーがうみ出すさまざまな「第二次調整」の手法である。具体的には仕事遂行時の各ユニットを超えての同僚間の連携、束の間の時間を調整しての会食といった「仲間との連帯」、さらには男性職員の利用といった「第二次調整」の実態が示される。

「終章 ユニットにおけるケア労働の特質—ながら遂行型労働論の提起」

終章では、二章、三章で明らかになった事実、すなわち、小規模化されたユニットにおいて利用者の尊厳に配慮したケアを提供するということは、ケアワーカーにとって、身体的・頭脳的労働として直接的介護労働と「疑似的家事労働」を行いながら、複数の利用者を視野に入れたうえで同時並行的に「気づかい労働」をしつつ、さらに 1 日のユニットの生活を踏まえて自らの労働過程をその都度再編していくといった「ながら遂行型労働」という働き方でしか充足できないといった事実を再度繰り返す確認した上で、そうしたケアが利用者が重度化した場合、維持され続けるのかという問いが立てられる。そして、重度化に伴い利用者が自己主張できず、家族や管理者からのケアワーカーに対する統制が適切に作用しない場合、ルーティン化した「作法としての寄り添い」といった状況が生じる事実が重度の利用者が多いユニットケア施設の実態から示される。

さらに、重度化に伴う高齢者の自己主張能力の低下により、ユニットにおける労働そのものが、家事労働の特性である評価されない、競争にさらされないといった傾向をより強めていく事実が指摘される。そして、そうした事実を踏まえ、ユニットケアで求められるケアワーカーが利用者と「人」として出会うケアの成立には、利用者(家族)・ケアワーカー・管理者の相互統制のありようが関わり、利用者及び利用者をめぐる人間関係に支えられて、要介護高齢者の「尊厳を支える」ための「気づかい労働」は成立しようという見解が述べられる。

次に、従来から存在したケアのスキルとしての「ながらケア」と、今回発見した「ながら遂行型労働」の相違を明確にしたうえで、「介護労働」「疑似的家事労働」とともに細やかに慎重に提供される「気づかい労働」が「ながら遂行型労働」の構成要素であることが改めて示される。そのうえでそうした特質をもつユニットにおける労働は単なる「感情労働」によつてのみでも説明できないし、上野千鶴子が言う「責任労働」といった表現が不適切であるといった理論的見解が示される。

最後に、今回は考察するに至らなかった残された課題が提示される。ひとつは、重度化の進んだユニットにおいて、どのような形でケアワーカーは利用者と出会えるのかといった問題であり、これは、今後利用者の重度化が進む中で求められる重要な視座である。また、過酷な労働編成のなかで複雑で高度な労働を成し遂げ、かつ自己維持していかなければならないケアワーカーの支援についての方策はどうあるべきかも、次の大きな課題としてあげられる。